

Y14b 世界天文年「アジアの星・宇宙の神話伝説プロジェクト」

矢治健太郎(立教大学)、海部宣男(放送大学)、嘉数次人(大阪市立科学館)、吉田二美、(国立天文台)、北尾浩一(星の伝承研究室)、ラムゼイ・ランドック(東北大学)、「アジアの星」ワークショップ
LOC

世界天文年 2009 のアジア共同企画として、「アジアの星・宇宙の神話伝説プロジェクト」が進行中である。日本だけでなくアジア諸国でも、プラネタリウムや学校・家庭での星・星座の話はほとんどギリシャ・ローマ神話だが、アジアには古来、豊かな星や月、天の川の神話伝説が伝わっている。我々は世界天文年を機会に、アジアの星や天体・宇宙にまつわる神話・伝説を各国の協力で集め、優れたものを編集して各国で同時出版し、教材等にも広く用いてもらうなど、アジアの星文化を広め共有することをめざしている。

このために、2009年5月11日から13日、「アジアの星」国際ワークショップを開催し、11の国・地域の代表者40名が参加し、約50もの各国・地域に伝わる星・宇宙にまつわる神話伝説について報告を行った。これらのアジアの星物語は上下巻の2冊の本にまとめられる予定で、収録する神話伝説の候補をこのワークショップで選定した。日本からはアイヌに伝わる「サマエンの星」、「トクゾウと北極星」、沖縄に伝わる「むりかぶしゆんた」を上巻に、七夕伝説に関わる話を下巻に収録候補となっている。

現在、国際編集委員会を組織し、各国・地域で物語を選定し、7月には編集委員会で上・下巻に掲載する内容をほぼ決定し、まず基本となる共同企画本(英語版)を作る。11月からはアジアの各国・地域語への翻訳と出版のための準備を始め、日本語の本も含めて、2010年前半の出版を目指す。また、日本独自の出版も計画中である。

本講演では、アジアの各国・地域からの候補となる物語を紹介し、今後の出版計画について議論する。